
とある怠惰な殺人者の転生記

想造者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある怠惰な殺人者の転生記

【Nコード】

N6575M

【作者名】

想造者

【あらすじ】

普通に戦闘中に死んだ、やる気のない殺人者のリボーンの世界への転生記。

山本武への成り替わりです。

割と最強で前世からの記憶のあるというだけ。

(注) この作品は原作キャラが別物になっています
(憑依や魔強化、TS、成り替わりです)

やる気無き殺人青年死す（前書き）

はじめまして。

想造者というものです。

初の小説執筆という事になります…。

意見などがあれば遠慮なく言っていただけるとありがたいです。
では本編始めたいと思います

やる気無き殺人青年死す

暗い・・・ただ暗い。

それだけの空間。

確か。

殺されたんだよな・・・。

銃弾？ナイフ？それとも出血？

・・・

どれでもいいか・・・死んでんだし。

死んだ者がどれだけ足掻いても死んだ者。

生き返ったりしないだろうし・・・。

・・・死んでも意識あるんだな。

天国やら地獄やらに行くわけか？

いや、俺が行くのは地獄か。

だって・・・

「ただの殺人者だしなあ」

「まあその殺人者が行くのは地獄でも無いんですけどね」

「・・・ああ・・・誰？」

「閻魔ですかねえ？一応」

普通に若い。見かけだけなら俺と変わらんか？

まあいいや。興味無いし。

「で？閻魔さん俺の行くべきはどこでしょうか？」

「驚かないのですねえ」

「今更。死人がどうなろうと知らないな」

「冷静・・・いえ、ただのバカですか？」

「違う。今は死者。そんなのが何考えてても意味ねえでしょうが」

「そうですね。まあ、貴方には生者に戻って貰いますが」

・・・・・・

「人殺しを？」

「ええ。私も驚きましたよ。別にトラックに轢かれたわけでも子供を助けたわけでもないのに・・・」

「拒否権は？」

「死者には選択の余地はありません。」

「・・・まあだろうな」

「しかし良かったですね」

「何故だ？」

「いやあ、二次元好きにはたまりませんよ？転生トリップというものは」

「知らねえっての。」

「一応心読めますからね？」

「じゃあ喋らん

「何ですか？」

「喋るのめんどくさいんだよ。」

「はあ、取り敢えず送りますよ」

「ん・・・分かった。」

「しかし・・・一体どんな世界だ？」

「出来れば退屈はしたくないんだが・・・」

「まあ

「なんとかなるか？」

「あー！転生特典忘れてた！まあいいや」

「いや良くない！」

「え！・・・様！！」

「お前も一緒に行つて来い！！」

「嘘お！！」

・・・

何か悲鳴が聞こえたが…気のせいだよな？

「（あゝやつぱ喋れんな）」

「大変この子産声あげないわ！！！」

めんどい

「おぎゃー」

「取つてもやる気ない産声だけどあげたわ・・・」
眠い

「お父様、大変元氣のないおとこの子ですよー」

やる気無き殺人青年死す（後書き）

という事でプロローグ終了。

「めんどくさい」

「何で私までなんですか!」

その場のノリ。

というか、一人だけで行くと少しまずい気がしてな。

「というか俺たちまだ名前出てないよな？」

「そうです・・・。」

転生先で決められるしな。

仕方ないだろう？

最初から名前を名乗る子供なんて不気味だろう？

・・・まあ名前は決定してるから安心しろ。

「分ったよ、」

という事で次回もお願いします。

無気力な子供のある日の大騒動（前書き）

赤ん坊の生活はとにかくつまらないので、五歳くらいまで飛びます。
今回は王道の感じに仕上がりました

取り敢えず今は親の影響を受けていますがまだ無気力です。

そして本編キャラが登場します。

では本編スタート！

無気力な子供のある日の大騒動

山本 燕 ヤマモト ツバメ 5歳。

それが俺のステータスである。

親父とお袋の無茶修行のせいで鍛えられたが……。
まだまだである。

「散歩行つてきます」

「おう！行つて来い！」

「8時までに帰ってくるのよ」

まだ五年しか一緒ではないがこの二人放任主義を超えて無関心に近い。

それは怪我をすれば助けてくれる。

でも……

「修行と言つて崖だらけの森とかに放り込んだりはやめて欲しかった」

親父は寿司屋兼破壊 とりこわし 専門店竹寿司をやっている。

母親は親父の金で生活できるので専業主婦。

しかし、何故尻尾が生えてるんだろ？

他の人にはそんなのないしなあ……

「まあいいけど……」

というかもしれない俺ってすごい変な子か？

周りから見て……ブツブツ言ってるし……。

「やめてよお!!」

「ダメツナがおれにさからってんじゃねえ!!」

・・・

子供の喧嘩である。

決して大人のアレな行為ではない。

「・・・見つけちゃったしなあ・・・」

めんどくさいが・・・ガキの喧嘩を止めないほど落ちぶれちゃいねえ・・・

「・・・あつた」

ポケットの野球ボール。

ボール投げは肩力を鍛えるのにちょうどいいいつも携帯している・・・。

安全な世界でもこういうのしてる俺って・・・

「まあ・・・いいかつとお!!」

全力で投球する。

虐めてるクソガキの足元を狙って。

「ひい!!」

「・・・ガキ・・・失せろ・・・」

「ウワアアア!!」

つたくめんどくせえ・・・。

親父に泣かしたのばれたら拳骨かな?

・・・いや、人助けしたから大丈夫かも・・・。

「あ・・・あの・・・おにさんありがとございました!!」

かんだな・・・

「ん、まあきにすんな。特になんかしたわけでもねえし。ああいう奴が嫌いなだけだ」

「でも・・・おかあさんにたすけてもらあたらおれいいいなさいてえ」

泣きそうだな・・・。

「分った。どういたしまして・・・これくらい大したことない・・・」

にしてもボールが目測三十センチほど埋まつてる。やり過ぎか？

「わ・・・わたしさわだつなっていていきますうしやいです」

「山本 燕だ」

「つばめおにいちゃん？」

「同じ年なんだが・・・」

身長124・・・対するツナは100・・・ないか・・・。

来年になればばれるだろうから・・・。

「そうだな・・・。一人で帰れそうか？」

さつき突き飛ばされていたし・・・

「えっと・・・あしいたい・・・」

「そうか・・・仕方ない家は分かるよな？」

「うん」

「おぶつてやるから。案内しろ」

「・・・う、うん」

十分ほどつなの要領を得ない道案内に従うと確かに沢田と書かれた表札があった。

「ここだな？」

「うん」

「自分で立てるか？」

「・・・」

「無理するな」

幸いインターホンに手は届く。

(ぴんぽん)

「はい」

子供っぽい女の声がする・・・母親か？

「だれですかあ」

「はじめまして。山本燕と言います。つながその公園で怪我をしてたので連れてきました」

「そうなの？ごめんなさい。つなの母の菜々よ」

見た目が同じ年・・・となると小3位か？

・・・口リすぎる・・・。

NG 顔面陥没

足元を狙って全力投球！！

「ふぎや！」

・・・逃げろ！！

無気力な子供のある日の大騒動（後書き）

という事で今回のゲストは女の子綱吉ことツナです！
なお今回は中学生しようとなってます

「沢田つなです・・・よろしく願いします」
「燕だ」

という事で第一ヒロインのつなはどうする？

「な・・・何をですかあ！」
「？」

まあいいや。

中学生編からはクロスオーバーネタ多くなるからね。

「そーなのかー」

「つなどうした？」

「いやこう言えってカンペさんが」

では次回もお楽しみに。

無気力子供の御屋敷訪問（前書き）

という事で前回から引き続き子供時代辺でお送りいたします。

なお今回の話を含み無気力子供は後三話ほどで完結を予定しておりますが

もしかしたらもう少し伸びるかもしれませんが。

・・・とまあ今後の予定は置いておいて、

どうぞ本編へ

無気力子供の御屋敷訪問

というかなんか理解する間もなくつなの家引きずり込まれた。

「ゆつくりしていつてね」

とのんびり言っているつなの母親（自称）

・・・というかツナの親父さんてもしかしてロリコンか？

・・・やばくなった時はつなは助けよう。

知り合いが変な事に巻き込まれ傷つくのを見ているだけってのも嫌だし・・・。

「じゃ、ごゆつくりい」

新手のいじめか？

・・・前世含め女の子と話したことなど無いが・・・俺って明らかに苦手にされるタイプだろ？

・・・目つき悪いし。

「つばめおにいちちゃん？どうしたの？」

「・・・いや自己嫌悪にはしっただけだ。気にするな」

「？じこけんお？」

「・・・自分の事を悪く思っただけだ」

「おにいちちゃんわるくないもん！！かつこいいもん」

・・・格好良ければいい奴か？

・・・

ダメだな前世の付き合いが格好がいいと世間的にされる悪男悪女しか知らん。

でもまあつなががそう思ってくれてるなら・・・

「・・・そうか。ありがとうな」

『それ』を演じるのも悪くない…かもな。

「おにいちゃん。おままごとしょ!」

世間的には天使の笑顔という奴で笑いかけてくるつながが・・・
俺中身・・・20代なんだが・・・

「いやだ・・・」

「え・・・」

ああああ!!もうめんどくせえ!

「泣くなよ・・・もつとほかの遊びならしてやるから」

羞恥心がやばい事にならなければな・・・

「じゃあ・・・いつしよにおひるね!!」

もう遊びではない。

だがこれ以上まずいのが出るよりましだ。

「じゃあ寝るか？」

「うん・・・おやすみにやしやい・・・」

もう寝た・・・一分たつてないぞ・・・

「・・・寝るか」

俺も疲れた・・・

・・・

「・・・怒られるかもな・・・」

外を見ると闇に包まれようとしている。

・・・ようするに夜である。

「・・・」

服をつかんでるつなを離そうとするが・・・強い・・・。
なんか強い。

もしかしてこいつも人外か？

「・・・どうしよう・・・」

「おい。志門のガキ」

聞きなれない声・・・

ああ志門は俺の親父の名前だ。

「・・・はじめまして。つなの親父さん」

「おう！・・・なんつー名前だ？」

「燕です・・・」

「燕か。まあつなを宜しく頼むぜ」

暗くてよく見えないが青い髪に赤いサングラス・・・。

こういうのつける人っているんだな・・・

「志門には連絡した安心しろ。今日は泊ってきな。明日には海外旅行だからな」

「は・・・？」

「何だ？志門から聞いて無かったか？明日から俺の家と志門の家合同で仕事に行くからお前らも来るんだよ」

「・・・分りました」

「？物わかりいいガキだな」

「慣れてるんで」

・・・にしても親父の仕事場が海外？

まだ副業があつたのか？

「まあこつちが俺もあいつも本業なんだが・・・」

聞いたことねえ。

というか親父がたまに家開けるのってこれが理由だったのか。

「まあ明日だ。寝とけ」

「・・・」

不貞寝ではない。

眠いだけだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「あ！おはようおにいちゃん」

「・・・ああ。おはよう、つな」

起きたばかりで頭が回らないな...

「おう。起きたか？もうすぐ着くからもう少し寝ててもよかったのよ」

「いえ・・・運転してる人の事も考えて起きとくのが道理でしょう？」

「・・・たつくガキらしくないな」

・・・

「絶対自家用ジェットだ」

「良くわかったな？燕」

親父たちと合流した。

なんか部屋割が男女で分けられたためつなどは別だ。

「にしてもどこ行くつもりなんだ？親父」

「親に向かってそういう口調はやめろって書いてあつたる本に」

「まず子供のしつけを本に頼るな！！バカ親父！」

「もう少し静かにしろ・・・寝れねえだろうが」

「ごめん・・・兄貴」

「燕・・・行先はイタリアだ・・・ひと眠りしてりゃあつくからお前も寝とけ」

「・・・分りました」

こうして俺も訳も分らぬうちにイタリアへ行くこととなりました、まる。

・・・言葉通じるかな？

無気力子供の御屋敷訪問（後書き）

今回は志門とに来てもらいました。

「で何しゃべればいいんだ？」

まあそこできつろいでて下さい

え」と。

分る方が居るかどうかわかりませんが。

クロスオーバー一番目グレンラガンよりシモン、カミナです。

最もグレンラガンそのものはまだありませんので安心してください。

・・・十年後では出る可能性は否定できませんが・・・

「そつえば、あつちに行ったあとは何する気だ？」

ええとあつちで鮫とボスに会って、遊びます

「遊ぶ？あいつらとか？」

はい。・・・まああまり気にしない方向で。

では次回をお楽しみに。

怠惰な子供と鮫とボス（前書き）

という事で他のファミリーより先にこの方たちに登場していただきます。

どういつ変革が施されているかどうかどうぞお楽しみあれ。

怠惰な子供と鮫とボス

「・・・でか」

「おつきいね、つばめにいちゃん」

「おい、燕後から来てもいいけど迷うなよ」

とか言ってる内に置いていかれてしまった・・・。
もう見えん。どんだけ歩くの早いんだ？

「・・・行くか？つな」

「うん」

ああ、もう。笑顔が痛い・・・。

悪人の俺にや騙してる奴の笑みを食らいすぎて心が痛いよ・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「迷った」

当然だ。そもそも俺は行くべき場所を知らない。
迷うなと言われても無理な話だ。

「・・・おにいちゃ」

「泣くな・・・。大丈夫だから」

しかしどうする？

地図でもあればいいがそんなもんは無いらしい・・・

「・・・どうしたんだ？」

？俺よりおおよそ30？上から声・・・？

少し低いが・・・女の人か？

「いえ・・・迷ってしまって。なにぶんはじめて来る場所ですから」

「・・・ガキの割には礼儀正しいな？」

「それ以外には今のところ特技が無いですから」

「・・・その眼いいな」

「？視力は特には！！」

危ない・・・ノーモーションから銃弾放つてなんだ？

本当に超人が多いなこの世界は

「やはり・・・動体視力が異常に高いな・・・」

・・・そういう人か

「・・・？逃げないのか？」

「現状だと無理ですよ・・・俺一人なら何とかありますがつながる状態じゃ無茶出来ないですし」

・・・

刹那の静寂の後突然彼女が笑いだした

「なるほどな！確かに冷静・・・本当にガキか？」

「一応ですがね」

「面白いなあ・・・ガキ、名前は？」

「・・・山本 燕」

「燕。お前をボンゴレ暗殺部隊ヴァリアーの幹部に向かい入れる・・・」

「」

「？」

「山本って事は志門の奴のところだな？」

親父の知り合いか

「ええ。頼みます・・・名前を聞いてもよろしいでしょうか」

「XANNXUS。ヴァリアーの隊長だ」

「よろしくお願いします・・・XUNXAS」

「ボスと呼べ」

「・・・ボス」

そんなにおかしいか？

ボスが笑えばなしだ

「おい！XUNXAS。うるさいぞ」

「スクか？このガキが面白くてな。隊に入れた」

「はあゝ。成り行きで物を決めるなと何度言ったら」

またか・・・

もしかしてヴァリアーは女性の部隊か？

「・・・ああゝ私はスクアーロ。なんとも呼べ・・・にしてもな
んでこんな所に？」

「ああゝ親に置いてかれて・・・」

苦笑いしか出ない。

つなは震えてるし・・・。

「ここはヴァリアー支部だ。連れて行ってやるからついてくるとい
い」

「お願いします」

・・・

ツナスルーされてる・・・。

「名前は？」

「燕です」

「燕・・・すまないな。XANXUSの我儘につきあってもらって」

「？わがまま？」

「・・・いや気にするな」

・・・

「失礼します・・・九代目」

「入るといい」

「すぐに退出します・・・子供を二人お連れしました」

「ああ志門君とカミナの子供だね？」

「・・・燕です」

今日は自己紹介が多いな

「さわだつなです！」

「よく来たね二人とも」

「・・・親父たちはどうしました？」

「ああ。少し別室で仕事しているよ・・・後で行ってみるかい？」

「いえ。俺は遠慮しておきます。邪魔になりかねませんので」

「そうか。じゃあ我が家と思って寛いでくれ」

・・・

「スクアールさんありがとうございました」

「・・・気にするな」

・・・

しかしこの後俺と彼女たちが合うのには9年の後であった。

怠情な子供と鮫とボス（後書き）

という事で。今回は改変された、スクアードとXANXUSの情報です

XANXUS

改変情報 性別、性格（原作に比べ優しい性格となっている）
身長 153（初登場時）

スクアード

改変情報 性別、性格（穏やか性格となる）
身長 149（初登場時）

怠惰な子供の就職活動（前書き）

という事で怠惰な子供シリーズ終了です。

今回は新キャラ出そうか？

というのは中身を見ればわかると思います。

・・・ではお楽しみください。

怠情な子供の就職活動

「燕。お前には中学入学までこっちで働いてもらっぞ」
「・・・」

（パリーン）

といういい音を立ててカップが割れ紅茶がカーペットに・・・

「・・・親父、日本人は中学卒業まで就労の義務は無いんだよ？」

「ここはイタリアだ」

・・・堂々と言ったよこのクソ親父。

「という事で兄貴の部隊に行って貰うから」

「つつーことでよろしくな、燕」

「・・・はあ」

つなが寝ててよかった。

起きてたら絶対ぐずる・・・。

「つつーことで、わりいけど先帰っといてくれ」

「わかったわ」

.....

「ここが部隊室ですか？」

「そうだ!!」

見ると同じ年くらいの女の子もいる。

男女比が4・3か。

どうなってるんだ？

この部隊はおかしいだろう？子供を堂々と配置するな。

「という事で今日からこの部隊に配属された燕と言います。コード
ネームはスパイスということになるらしいです」

「おい。みんなも自己紹介しろ」
「・・・雇われているだけだが・・・スネークだ」
「ターメリックだ。よろしくな」
「オレガノです。親方様の秘書をしております」
「ばじりこんです。よろしくおねがいします」
「ラル・ミルチ」

全員シンプルイズベストでも思ってるのか？
あつてるけど。

「まあ一応だが・・・俺はカミナだ。よろしくな。燕」
「・・・それはいいんですが。この部隊って一体？若い人多いですよね？半分は10代以下ですし」
「まあ、気にするな！・・・そうだな。この部隊はボンゴレの門外顧問でな」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ようするに基本仕事ないんですか？」
「ああ、だからとにかく体鍛えらると思っておけばいいぞ。丁度バジルは同じ年だ。仲良くしてやってくれ」
「あゝやつぱり同じ年なんですか」
「え？おないどしだったんですか」
「ああ、一応五歳だ」

うわゝこの子つなと一緒か・・・
笑顔が辛い。

「まあ体格的な問題でもつぱら組み手の相手はラル・ミルチとバジルになるが構わないよな」
「ええ。かまいません」
「ねえ、ぶきはなんなの」
「一応これ」

とナイフを取り出して見せる。

「とこれとこれとこれとこれと・・・」

銃に棒手裏剣に鎖に鎌に手榴弾もとりだす。

「待て！出し過ぎだ」

「・・・これくらいは仕込んで当然じゃあ？」

「・・・本当にカタギだったんだろ？な？カミナ」

「・・・やっぱあの倉庫の持ち出し禁止でしたか？」

さつきカミナさんが武器選べって言ったからいろいろとったんだが・

他にも鉤爪とか閃光弾やらも入れてある。

「・・・とにかく組み手だな・・・その武器を使えるか見てやる」

「・・・分った」

取り敢えずは、鎖かな？

「・・・開始！！」

「はあ！！」

上から下への殴り・・・当たらないな・・・。

「これでもくらえ！」

「当たらん！」

ナイフを投げたが当然のごとく当たらない。

へこむなあ・・・狙い通り過ぎて。

「つらあ！！」

鎖を持つて跳躍。

ラルの肩に乗りそこで再び跳躍そのまま後ろに着地。

直後ラルが倒れる。

「な・・・んだと？」

「奇襲成功。つてやつです」

ナイフの持ち手に鎖をつけておいたのだ、最も細いやつだから気付
けなかったか？

「まだやります？」

「・・・いいや。油断していた。完敗だ」

よし上手くやっていけそうだ。

「良いセンスだ。スパイス」

「スネークさん？そうですか？ありがとうございます」

「本当に五歳か？」

「あ、ラル大丈夫？」

「呼び捨てか・・・まあ構わない・・・」

その後全員の事を呼び捨てする事になった。
最終目標は打倒親父！
である。

怠惰な子供の就職活動（後書き）

今回も改変したのはアルコバレーノ全員の設定です。

後バジルが女の子ですね。

アルコバレーノの呪いは、歳を取らなくなるに変更しておきました。
・・・たんに赤ん坊だとどいう風に動かせばいいかわからないからですが・・・

（技術不足です）

という事でクロスオーバー第二弾

メタルギアソリッドシリーズより。

BIGBOSとネイキッド・スネークです。

まあ彼の出番はリング争奪戦まで無い予定ですが・・・

では次回をお楽しみに。

怠惰な少年の中学入学（前書き）

という事でいよいよ原作介入です。

守護者勢は今回はまだ出ない予定です。

では本編をお楽しみください。

怠惰な少年の中学入学

「スパイス、ラル。命令だ」

「……なんすか親方。つまらん命令じゃないでしょうね」

「できれば、オレも遠慮したいが……」

「ああ。中学へ入学してもらおう」

┐
┐
?
┐
┐

「並盛中学、つなの護衛だ」

「ちよつと待て！ 燕はともかくオレはこの戸籍上20超えて・・・」

「これを見る」

-
-
-
- ?

日本の戸籍表？

•

•

•

「親方……何で俺の双子の姉の部分がラルなんすか!!」

「戸籍なんざ金で買える！」

「
・
・
・
行くぞ」

??

「いいんすか？」

「もう戸籍の問題は無いしな。そもそもオレは初等部までの教育しか受けてない。戦時中だったし」

・・・それでいいの？

「まあよろしく。姉貴」

「ああ」

という事で、俺とラルは日本の並盛へ向かう事になった。

[illegible]

日本についた。

それはいい。
だが……

「迷った……」

おかしいな、ラルとは手つないで一緒にきてたはずなのに。
初日から学校遅刻はありえない。

早くつかねえと・・・。

[illegible]

「俺んちだよな此処」

改造されまくりじゃねえか！

何だ！ブレイク工業竹寿司って！寿司の要素ねえっての！

「お！燕！学校行かなくていいのか？」

「迷ったんだよ！」

「
・
・
・
はあ
」

「仕方ねえだろうが！土地勘ねえんだよ」

「飯にも生まれた町だろうが」

「5歳で出た町の事を覚えてるはずねえだろうが!!」

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

まあ地図があれば一時間もすればつく……。

ってもうこんな時間かよ！

急いで教室・・・？

あっちが騒がしいな。行ってみるか

•
•
•
•
•
•
•

「やめてよお」

「五月蠅い！ 笹川京子は俺のものだ！」

「だからボクは・・・」

「良いから勝負だ!!」

「おいその」

「あぁん!!」

「・・・そいつは俺のダチなんぞでな? 何しようとしたか言ってみろ」

「こいつのなんだろうとかんけい」「いいから言ってみろ」

「こいつをぶちのめそうとしたんだよ!」

「・・・分かった。じゃあ・・・俺が代わりにやってやるよ」

「え、ダメですってそれじゃきみが」

「・・・心配すんなって。燕兄ちゃんが守ってやりますから」

「!?!」

さて始めるか?

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ルールは簡単だ。十分以内に俺に一本もしくは気絶させたら勝ちだ!」

「防具いいのか?」

「かまわねえよ! 剣道初心者相手ならな!」

「・・・内心こいつを嘲笑ってる。全力で。」

「じゃ、やろうか」

竹刀を片手で持ち正眼で構える。

「な!」

「どうした? 竹刀くらい片手で持てるだろう? じゃ・・・行くぞ?」

縦に一気に振り下ろす。

まだ当てない。

いくらでもチャンスは・・・

「・・・納得いかねえ!」

何なんだ! まだ当ててすらないし!

いきなり気絶って・・・。

まあいいや。

「審判コレかたづけとけよ」

竹刀を投げると体育館の床に刺さる。

あれ？全力投球じゃないんだけだな。

「燕おにいちゃん!!」

「久しぶりだな。つな」

「何処行つてたのさ!!」

「ちよつとアラスカ奥地まで」

「本当に心配したんだからね・・・」

「・・・あの・・・ありがとうございます」

「・・・えつと・・・さっきの話からすると君が京子って子か？」

「はい。助けてくれてありがとうございます」

「あゝ敬語じゃなくていいぜ？俺1年だし」

「お、同い年？」

へこむな・・・

「・・・俺ってそんな老けてるのか？」

「え？違うよ！？だって背も高いし、大人びてるし」

「ってなんで同い年って教えてくれなかったの!!」

「いや。あんときは小学校は居ればわかるだろってたかくくってたしな」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「すいません。遅れました・・・」

時計を見る。

午後四時。

前を見る。先生前でHR中

結論

「・・・授業を何だと思っているんだ!!」

怒鳴られる・・・

怠惰な少年の中学入学（後書き）

今回は燕とラルのステータスです。
燕。

身長180 体重62？

血液型AB、性格怠惰

見た目、グレンラガンのシモンの髪が背中につくぐらいまで伸びた
イメージ。

ラル

身長148 体重？？？

その他は変わらず。となっております。
では次回をお楽しみに

怠惰な少年と爆撃少女（前書き）

今回は原作獄寺君には変化を付けてみました。
ではどうぞ。

怠惰な少年と爆撃少女

6月

異常気象か梅雨にいったが、まだ雨は降らない。

しかしやはりこの時期特有のジメジメした蒸し暑さは俺にとっては気分を良くしてくれる気持ちよさを持つ。なんと言うか心地よい。

しかし・・・

「・・・」

「何でいらいらするラル」

「熱いのはあまり好きじゃない・・・」

子供っぽいなあ。

こういう湿った感じは風をいつも以上に気持ち良く感じさせてくれるのに。

「ボクもあんまり好きじゃ無いなあ」

「とことん嫌われてるなあ。この天気」
冬ならみんなが好くだろうにな・・・

「おい！」

「ん？」

随分下の方から声が・・・

「並中って場所はどこだ！」

「兄弟でもいるの？」

つながそう聞くと少女……いや幼女は

「おれが通うんだよ!!」

「・・・取り敢えずこの子交番に連れてくから一人で先にいって行って」

「抱え上げるな！連れて行くな！変態がー！」

ホントうるさいな。

最近俺本気でキヤラ崩れてんぜ？
怠惰じゃなくてこれじゃおせっかいだ。

「はあ」

「降ろせえ！！」

「卸せ？奴隷商に売るわけにはいかな。流石に」

「そつちじゃねえ！下に降ろせ」

ああ、そっ
ちか。

川に
と思
いそ
のま
ま下
に放
り出
す。

「ちよ！そっちじゃねえっての！！」

という声が聞こえたが……

「無理だつてもう投げてるし」

「覚えてろおおおとおおっ！！！！！！！！！！！！！」

「！」

「・・・学校行くか」

幸いまだ間に合う時間だ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「そういえばあの子どうしたの？」

・・・朝の子供の事か？

「捨てた」

「そうなんだあ」

・・・

「おい。それは日本法律では犯罪・・・」

「そんな通りだとちくしょー！！」

？・・・

「ああ、朝の子か？」

「朝の子か？じゃねえ！テメエのせいで服は汚れちまうし！！・・・」
「・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・

「もう授業始まるし寝るぞ」

「おかしいだろその選択肢は！！」

「五月蠅い。いろいろあつて睡眠不足なんだ」

今日は本気でやめて・・・

ヴァリアーの会合に三日間徹夜で酒呑み明かしたんだから。
二日酔いなんだ

「つく！二倍ボム！！」

「増えたって意味が無いっての！これで決める」

閃光弾を取り出し空中に放り出す。

そして真正面にナイフを十六本投げる。

すべてダイナマイトの導火線を切る。

チェック・・・

「メイトだ」

鉤爪を眼前につきつける。

顔をあげる。

「・・・つく」

泣き顔だ。

やばい。バジルとずっといたから大体子供のなくタイミングは分る。

・・・

結果俺はそいつが泣きやむまで頭をなでたぐらいである。

P・Sその後つなに小さい子を泣かしてはダメと言われ怒られた。
獄寺（さっきの子の名字である）はつなを十代目と慕うようになった。

怠惰な少年と爆撃少女（後書き）

という事で。

獄寺スズメちゃんという事になりました。

「何で俺口りっ子なんだよ！」

次に登場するのが大人口りだから。

「意味わかんねえよ！」

次回をお楽しみに

「逃げるなあ！」

怠惰な少年と女神っ娘（前書き）

さて予告通りのキャラを召喚します。

それではお楽しみあれ。

怠惰な少年と女神っ娘

「…………早く起きすぎたか？」

太陽も見えないし。

「起きるか」

寝れそうにない。二度寝出来ないんだよな。
ったくめんどくさいな。

「親父走りこみ行つて来る」

「おう。行つて来い」

流石朝からやつてる寿司屋の店長朝が早い。

しかし何でマント一枚の、裸なんだよ。

下は履いてるぞ？親父の名誉のために言うが。

……………

親父に負けた。

親方の所で実践もつんだが、まだ足りなかった。

閃光弾や鉤爪、ワイヤ、ナイフも、銃弾でさえすべて螺旋の槍と剣にはじかれた。

「足りねえなあ」

たぶん親父に勝つには、悔しいが力も心も足りない。

……言つてたらまた悔しくなった。

「見つけたあ！」

「っ！ 誰だ」

まだ日も昇りきってない。暗くて姿が見えない……。懐から鉤爪を取り出し手に付けておく。くそ。門外顧問に居た時に結構派手に暴れたから恨みの数は割とあるだろう。

誰か特定できん……

「覚悟お！」

再び蹴り。今度は受け止める。

「やるね。流石元殺し屋。腕は落ちてないって事ですか？」

「……誰だテメエ。何で前世の事を知っていやがる」

「……あんたのせいで！ あたしは下界に落とされたんだよ！――」

「……考える奴が一人しかない……」

「あそこのやたらラノベ好きの女神か」

「そうよ！ あんたのせいで、大好きなラノベ見れないんだからね！ どうしてくれるの」

「神なんだから自力でとれよ」

「無理に決まってるでしょ！ 神通力使えないんだから」

「……」

「じゃあさ？ ぶつたおしても構わないな！――」

鉤爪で三度切りかかり、当たらなかったことを確認して高速で後ろに引きさがる。

「随分早いわね」

「あいにく速度が昔から取り得でな……本気で行こう」

ナイフを宙に投げ昔を思い出し叫ぶ。

「それじゃあ零崎をはじめよう。お前の体！ 殺して、解して、並べて、揃えて、晒してやんよー！」

一息に言い切り、本気を始める。

鉤爪を思いきり振りきり踏み出した足を軸に回し蹴り。

「危な……遅い！！」

ナイフをその場で回し蹴り。

「やっぱり零崎！！ 普通じゃ無いじゃない！！」

「ただのとは言ったが普通のととは言ってない。にしてもあの速度のナイフ回避出来るか？ 普通」

「人間と比較するな愚か者！」

「……………もうどうでもいい。お前が何であろうと関係ない。オレの前じゃ誰であろうと全席指定。正々堂々手段も選ばず真正面から奇襲をかけて見せよう」

「あんたは策士か？ それとも人間失格か？」

「さあ？ 昔の事で覚えているのは……………って呼ばれてたかな？」

「……………もういいや。やめた。勝ち目が無いし」

やつと終わった。零崎をやめる。

「にしても零崎って理由なく人を殺すのに」

「だから言ってるだろう？ ………………って呼ばれてたって」

「ああ。だからか」

まあぴったりだと思っただけだな。

「じゃあ俺は帰るぜ」

「あ、待って」

「何だよ、閲覧者」

「家が無いから泊めて」

「やだ」

「ひどい！ 10歳児を」

「……………160の十歳児は大人だ」

「……………後ろから恨むように見られる……………」

「ああ！！ もう来いよ！ クソガキ」

っ
たく・・・・・お人好しになっ
たもんだな。

怠惰な少年と女神っ娘（後書き）

という事で最初に出て以来で無かった、閲覧者、女神の登場です。
名前は次回に出ますので。

ではまたのお越しをお待ちしております。

怠惰な少年と格闘戦士と委員長（前書き）

この話での変更点としてまず、

三浦ハルは出てきません。（理由としてはまずリボーンが赤ん坊ではないため）

というカイピンも出ません。（ランボが居ないため使いにくい）

十年バズーカはありますので十年後編はしっかりありますよ。

早くボックスだしたいなあ・・・

あ、本編どうぞ

怠惰な少年と格闘戦士と委員長

女神ことハルが住み着一て一週間がたった。

名前は……俺がつけた。

いい名前だつて喜んでけど、頭の中身がハルって意味で付けたんだけどな。

「それで今度は何だ？ 最近は俺を襲うのが流行か？」

昨日も一昨日も不良に絡まれてイライラしてるんだ。

風紀とか名乗りやがって、どう見ても風紀乱してそうじゃねえかよ！

「ああ。はじめましてだな。俺は笹川了平という」

「……山本燕。用件は？」

「手合わせしてもらいたいのだ」

？手合わせだと？

「俺よりそういう部活に入った方がいいんじゃないか？」

「……つまらなかった。柔道、合気道、ムエタイからボクシングまで全部の大会に出た……が！俺の気持ちを奮い立たせる相手がだれ一人いなかった。自衛隊の訓練に行つてCQBまで覚えた。自衛隊も相手にならなかった！！」

こいつ……バトルジャンキー……戦闘狂か

「だが……お前は違った。これほどの殺気にも動揺しなかったのだからなあ！！」

っ！・・・・・・・・確かに殺気が・・・・・・・・慣れ過ぎてるのは拙かったか。

「・・・・・・・・殺し合いか？」

「いいや。ただの手合わせだ、殺し合いは好かん」

・・・・・・・・CQBって軍隊で殲滅戦の時に用いられるんだが・・・・・・・・スネークの事知ってるかもなこいつなら。
「なあ。笹川。スネークって知ってるか？」

「何故師匠の事を知ってる！！」

あゝやっぱり。

「一応知り合い。というか戦友？」

「なら・・・・・・・・勝負だ！俺はCQCだけはマスター出来なかった・・・・・・・・行くぞ！」

「待て・・・・・・・・」「問答無用」

仕方ない・・・・・・・・

「零崎をはじめよう」

今更ながら使いこなせるのCQCかCQBくらいなんだが。
・・・・・・・・

たぶん・・・・・・・・二時間位打ちあい・・・・・・・・授業はとっくに始まっている。

クソ何が楽しくて学校の校庭の中央で殴り合いせにやなんのだ！

「っはあ！ 第二段階だ。俺の前では悪魔でさえも全席指定。相手が格闘戦士であろうと正々堂々真正面から不意打ち打って見せよう！」

「戯言をー！」

「やめてくださあい」

ぴたり、という擬音の後に声の方を見る。

「ダメですよ。こっこのやっちゃん」

「……誰？」

「雲雀ではないか。久しぶりだな」

「うん。久しぶり了君」

「だから誰だ」

「えっと、僕は風紀委員長。雲雀恭弥だよ。恭ちゃんって呼んでくれればいいよ」

「……何だろう。つなや京子と同じ感じがする。」

「失礼だが委員長。男か女か答えてくれ」

「男の子だけど」

決まった。作者は病人だ……。作者って誰だ？

「まあとにかく悪かった。以後気をつけよう」

「分ればよろしい」

「俺からもすまなかつたな」

「二人とも反省してね」

「……………取り敢えず授業行くか」

「もう昼だな」

「というかもう学校終わったよ?」

「…………マジですか?」

「もちろん」

時計を見る。13:00 今日土曜日。

さぼりかよ。

「……………じゃあ、また今度」

「おう。じゃあな」

「またね」

いつも以上に疲れた……………

怠惰な少年と格闘戦士と委員長（後書き）

という事で……

キャラクターまとめページを作る事になりました。

何故という事ですか？

変更しすぎたためいつそのこと変更点まとめページまとめたほうが
いいと思ってしまいました。

という事で次回はキャラ設定更新です。

登場キャラクターたち（前書き）

キャラクター設定ですね。

設定が分りにくいでしょうのでは？

登場キャラクターたち

山本 燕

身長 180 越え

戯言の世界から転生。元零崎。

元はとてもでかい剣を使っていたらしい。

言葉に力がこもっているらしく。

いくつもの言葉で常に力を使わないようにして殺す時のみ開放する。
しかしそれを解くためにはまず

「零崎をはじめよう」と言わないとならない。

現在はボンゴレの3つの機関に属している。

装備品 無限バンダナ、鉤爪、ワイヤ、閃光弾、手榴弾、ナイフ

etc

沢田つな

身長 146

原作沢田綱吉よりもだめではないが弱気になっている。

しかし

握力や基礎身体能力は高くなってむしろ原作よりも強い。

現在家庭教師が付いているそうだが……

獄寺 雀

身長 127

原作獄寺がロリっ子になりました。

原作よりもダメっ子。つなに忠誠は誓っています。

燕にはいつもイライラさせられる。

武器はやっぱリダイナマイト。お菓子でホイホイ付いて行く。

ハル

身長 160程度

元女神 閲覧者。

世界を監視する………と言えは聞こえはいいが適当にやっても上にはばれないため一人下界の小説を読みながらネトゲをするダ女神ライフを送っていたが燕の件がばれ下界に降ろされる。ポジティブなのかすぐに順応したそうである。

今は小学校に通わされているが基本的に中学校に逃げて来る。

雲雀 恭弥

身長 140前半

風紀委員長にして不良のアイドルのシヨタっ子。

女の子ではない。あくまで男の娘。

寂しがり屋である。

いつもおろおろしているがやる時はやる。

了平と仲がいい

笹川 了平

身長 170前半

無所属。冷静で戦闘狂 バトルジャンキ-

基本的に格闘技を覚えまくっている。(ただしCQCは未使用。C

QBは使用可能)

雲雀とは小学生のころからの付き合いらしい。

特技に菓子作りがあるが妹のために作れるようになったらしい。

登場キャラクターたち（後書き）

一旦ここまで。

割と更新する予定です。

怠惰な少年と家庭教師（前書き）

いよいよリボーンの登場。

怠惰な少年やはりバトル？

怠惰な少年と家庭教師

「うおおお!!」

突貫。突進。突撃。

親父との戦闘に退くという言葉は使えない。
使いたくない。

ひいたら負ける。止まっても負ける。
貫かれ、削られ、砕かれる。

「まだ甘いぜ。燕」

時雨双燕流。

完全無欠の剣術にして槍術である武術。

親父で八代目であり一撃一撃の重さ、早さ。

そして何より……進化。

それが完全無欠を掲げる所以。

「ま……だ……だ」

「頭冷やしな燕。闘いは心は熱く。頭はクールにだ」

……

「そつだ。お前の頼んでた武器出来たぞ」

「ホントか親父！」

「……現金な奴だな。ほらよ」

片手でそれが投げられズドンという音を立て地面に刺さる。

「・・・・・・・・・槍は？」

「バカ野郎。その大きさを片手で振り回すのになれるのにはお前でも一年かかる。頼んじゃいるがまだかかるっての」

当然か。なんせこの大きさだしな。

「銘は決めたか？」

「もちろん最初から決めているよ」

絆を繋げ敵を切り刻む刀。

「シグレケイコウ時雨繫刻」

「良い銘を与えたな」

刃の部分だけで130柄を含めると170に達し幅も大きく包丁にも見える。

「もうひと試合。お願いします」

「・・・・・・・・・いいだろう。見せてやる。俺の力を」

・・・・・・・・・

結局一本も奪えぬまま修行は終わり今はつなの家に向かっていた。

「しかし・・・・・・・・・この手紙つなが書いたものじゃないな・・・・・・・・・」

出だしがイタリア語だったし。

「・・・・・・・・しかも武器持参だったし」

怪しすぎるよな・・・・・・・・

「ようやく来たか」

殺気。

黒帽子に黒いスーツ。肩にはカメレオン。

・・・・・・・・親父やあっちの人類最強と似た感じだな・・・・・・・・。

「勝ち目は・・・・・・・・零・・・・・・・・だが」

つなの家に入れるわけにはいかないな・・・・・・・・

「命かけてやるよ。最強！！ここからは行かせない！！」

斬、斬、斬、斬。

一撃一撃は鉤爪レベルで無いほどの重さ。

そして早さも。

すべてが異常。すべてにおいて今まで以上。

「零崎をはじめよう」

「話を聞け・・・・・・・・山本燕」

・・・・・・・・名を抑えられている・・・・・・・・

「俺はリボーン。黄色のアルコバレーノであり、つなの家庭教師。あいつをマフィアのボスにしに来た」

「殺氣に向けた理由は？」

「実力と忠誠心を試すためだ」

「俺は忠誠を誓ったりはしないぞ。あくまで家族のためだ」

「……そうか。正解だな。……実力を試す。
構わないな」

「ここでやる気か？」

「……」

「河川敷……か」

「ここなら邪魔は入らない」

全力で行かなきゃやられる……。

「俺の前では虹であろうと全席指定。真正面から正々堂々奇襲をうつて見せよう」

「おもしろい。うけてやろう」

斬。

相手はワンステップで攻撃を回避。
それを追うように三回の突き。
当然のように悠々と回避される。

「……速いな」

「剣速だけなら、まだ負けてねえ!!」

一度だけ見たあの技で……………

「鮫特攻!」

「……………そこだぞ」

一発の銃弾。

それを身体を傾けながらそのまま走りぬけ交わす。
攻撃は止まらない。

大地をえぐり、リボーンに牙をむく。

「甘いぞ」

何処から取りだしたか知れない十手に止められる。
ふざけんな。

こんな所じゃ止まらない。
こんな所で負けない。

「俺の剣は……………」

十手をはじく。

「天を喰らう剣だ」

一撃を入れる……………

しかし

「そこまで……………」
頭に銃口を付けられる

「お前の負けだ」

……………俺は敗北した。

こいつ……つええ。

「まあ関係ないんだけどな。おまえ、つなのファミリーになれ」

「…………俺ってファミリーじゃなかったんだ」

「…………ああ」

取り敢えず、認定には合格しようだ。

怠惰な少年と家庭教師（後書き）

という事でリボーンの登場です。
姿は大人と変わりません。

最後の十手はレオンが変化した、アニメ版のものです。

まだまだ続きます。

次は誰が出てくるか。

お楽しみに

怠惰な少年と跳ね馬とオリキャラと（前書き）

という事でオリキャラを出します。

ちよつと別に書いてる作品の主人公ですので

まあちよつとした伏線とでも考えておいてください。

怠惰な少年と跳ね馬とオリキャラと

「ね、ねえ。おにいちゃん」

「どうした？」

「あ、あ・あの一緒に帰ろー!!」

どうやらこれを伝えたかったらしい。

「かまわないぞ？今日は特にやる事無いし。課題も全部終わってるし」

はつきり授業嫌いだし。課題になる前に教科書全部終わらした。

副教科でもない限りは俺に死角は無い。

そして今日は基礎教科だけであつたため授業を上の方で聞きつつ脳内では

身体の動かし方をシュミレートする。

そして当てられたら式を見て答えるだけ。

「もう終わったの（一緒に課題やろって思ってたのに）」

「そんなに難しくないしな」

「ってか課題学校でやるなよ」

と雀。

「まあいいじゃねえか。優等生」

「何で棘含んでんだよ」

ってか何でへこんでんだつなのやつ？

「まあいいや、終ってないなら教えるからいしてやるぜ？」

「ほんと！」

「あ、ああ」

何でハイテンションなんだ？

・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・おまえん家ってさ、いつもこんなのだっけ」

見ると黒づくめの男が何十人も・・・・・・・・ってか

「なんでいるんですか？ロマーリオのおっちゃん」

「おう、シモンさんのとこの坊主元気にしてたか」

「一応な。ってあんたが来てるってことは」

「まあうちのボスもきてる」

面倒だな。

「まあお邪魔します」

「た、ただいま」

・・・・・・・・

という事でつなの部屋。

ってかこの年齢で堂々と年頃の娘の部屋に入るっていいのか？

「……………で、やっぱりか。久しぶりですね。姉さん」

「ひっさしぶり〜」

三年ぶりに会ったディー姐さんは昼だというのに発泡酒を開けていた。
相変わらずのダメ人間だ。

「まあいいじゃん。それよりさ、『人喰い鳩』とのうわさ知ってる?」

「一応、C E D E Fのメンバーに一覧されていたから」

しかし、写真を見る限りは派手好きだ。
赤い髪を一房だけ青く染め、自分の空戦艦を真っ赤に染めているらしい。

しかもでかい割に現在搭乗している人数は3人という少なさ。
しかし、その実力は親方や親父しか今はいないC E D E F七天に加えられるほどの実力者らしい。
現在は、行方知らずらしく何処に居るかもわからないそうだ。

「ってことぐらいは把握しているが」

というか後ろ二人が付いて来れてない。

「まあ仕方ないんじゃないか? あいつらの話というか能力は常人には理解不能だし」

「そつで……………誰だお前は!!」

「ああ。C E D E F 七天の雲。黒空永人だ」
クロソラ エイト

黒空永人。たしかに七天の一人。
大型の槍を振り回しながら敵をなぎ倒す。

「大男つてのは嘘か」

「うるさい！」

身長149程の男の子であった。

「あ、そうだ。その三人について教えて下さいよ」

「あゝそうだな。嵐の空は指をはじいて物を壊したりする。雷の空は剣でふれた物を壊したり、光速移動したり骨折とかを気のせいにしたりする後もう一人は七天ではないけど何処に隠れていても誰も逃げ切れない力を持つ」

・・・・・・

「恐ろしいな・・・・・・」

「んでそいつらが最近、復讐者たちに喧嘩を売ったらしくて」

「・・・・・・ウソだろ？」

「本当だって。それでその要求を押し通したらしいよ」

「どついう要求？」

「マフィア法72条。実験体にされた子供たちはそのファミリー内においての行動なら罪を不問とするにさせたらしいけど？」

怠惰な少年と跳ね馬とオリキャラと（後書き）

という事で今回もクロスキャラが居たんですが……
えゝ、人喰い鳩の搭乗者はウィザース・ブレインという
ライトノベルの登場人物となっております。

分った人が居れば幸いです。
それでは次回もお楽しみに。

怠惰な少年と体育祭（前書き）

初別視点、sideつなです

今回は一体どんな話になるか………
どうぞ

怠惰な少年と体育祭

「体育祭だ〜いやだな〜」

「え？楽しそうじゃん！！」

おにいちゃんすっごく興奮してる。

珍しいと思ったので聞いてみた

「珍しいね。おにいちゃんが張り切ってるって」

「人間初めては興奮するんだよ」

そういえば、あつちで学校通ってなかったって聞いたな〜。

「所でさ。このメンバーに勝てるヤツいるのか？」

メンバー？

ボクとおにいちゃんと笹川先輩と雲雀先輩と雀ちゃんと京子ちゃん、ラルさん。

「というか人数これだけ？」

「体力検査の結果重視だからなうちの学校」

「っていうか徒競争どうするの〜」

「了平先輩」

「何だ？」

「槍は持参ありますか？騎馬戦って書いてあるんで」

そういう意味じゃないよおにいちゃん。

「もちろん持ってこい」

そこで了承出さないでくださいよ。先輩。

「よし！」

「ふたりとも。おちついて」

「大丈夫だ恭弥先輩。持ってくるのは鉄じゃなくて木製だから」

「なら安心だね」

「何処がですか〜！」

もう寝ちゃおう・・・・・・・・・・。聞いてくれそうにないし。
・・・・・・・・・・

ううゝ疲れたゝ。

「やっと起きたか？」

あれ？ボクの部屋・・・・・・・・

「お前風邪ひいてたんだぞ？ 辛いなら無茶するなよ。じゃあ帰るからゆっくりやす・・・・・・・・」

「待つて・・・・・・・・寝るまで一緒に居て・・・・・・・・」

拒絶されるのが怖い・・・・・・・・

「・・・・・・・・分ったよ。おやすみ」

次の日。

ようするに体育祭当日です。

「よう、つな。風邪治ったか？」

後ろを振り返ると。

ボクの背よりも長い木刀と槍を担いだおにいちちゃん。

「いつたい、体育祭を何だと思ってるの？」

「え？ 全力で敵を再起不能までたたきのめす大会だって聞いたけど」

「誰に？ 笹川先輩？」

「リボンさんだけど」

あのバカテキョー！！

「ま、頑張ろうぜ？」

「じゃ、行くぞ」

体育祭は僕たち七人对全校生徒という圧倒的なものです。

圧倒的にこっちが有利です。

なぜなら。

「これだけ戦闘とかに偏ればね」

七割が柔道とか空手とか。

おかしいよね？

この体育祭。

柔道・・・・・・・・

「男の勝負は格闘だ」

笹川先輩が次々と投げ技を決める。

しかし一発で気絶するようにやっていいのかなあ？

空手・・・・・・・・

「双燕流・陰 無刀流 震撃」

頭をつかんでシェイク・・・・・・・・空手？

剣道

「ええー、ほんとうにやるの・・・・・・・・」

雲雀先輩、声が震えてる。

「雲雀は下がっておけ。俺がやる」

あ、笹川先輩が代わるのか。なら安心・・・・・・・・。

そして騎馬戦。

「ラストー！」

「「「おおー！」」」

みんな盛り上がっている。
こっちのチームは。

騎馬組

ボク、おにいちゃん、笹川先輩

雀ちゃん、京子ちゃん、雲雀先輩。

もう片方の騎馬不安。

「っていつかコレ肩車ですよね？」

肩の上に腰をかけている。

二人は肩を組んでる状態だけど……………。
どうやってやる気だろう？

「先輩？準備はいいですね？」

「おう」

「開始ー！」

（ぱーん）

「突貫だー！」

二人とももう片方の手には……………槍！？

「つつぶれるー！」

「ちょ、おにいちゃん自重してええええつえつえ！……！！！！！」

幸い死人は出ませんでした。

怠惰な少年と体育祭（後書き）

．．．．．もうそろそろ黒曜編まで行きます。

あ、その前にコロネ口出さないと．．．．

では次回をお楽しみ～

怠惰な少年と闇宵の怪（前書き）

これで分る人いるだろうか？

まあ今回も楽しんでござんください。

怠惰な少年と闇宵の怪

「・・・・・・・・」

後ろを向かずに走り続けている。
当然？

違う。向いたら死ぬ。

勘が叫ぶ。

「貴方は食べれる人類？」

その言葉だけで分かる。

アレは人じゃないと。

親父やお袋とかと似た匂いが。

あれは人を超えた匂い。

多くの血の匂い。

「零崎じゃあ・・・・・・・・きついなあ」

ありがたいのは、武器が両方ともある事だ。
お守りもある。

「・・・・・・・・やるか」

気を引き締めるじゃない。

覚悟を決めるじゃない。

ただやるだけ。

「……まだ死にたくない。」

「いくぞ。零崎をはじめよう」

剣を振り上げ切り裂く。

しかし切った感触はしない。

「それで終わりか」

「訳ねえだろう」

大剣を横に薙ぐ。
再び虚空を切る。

「やっぱりそこまでか……」

近づいてくる。

今は夜。

ここならそれでも効くか？

「喰らいな」

閃光弾のピンを抜き投げつける。

「なんだこれ」

明るい光が闇夜を照らす。

そこに剣を回転させながら突き刺す。

「双燕流、一の型 車軸の雨」

ずぶり、という感覚。

「……………まだ生きてるとはな。化け物か？」

「そつだよ。ルーミアは妖怪だよ。だから人を襲うんだ」

なるほどな……………

「俺は殺人鬼、零崎……………だ。ただの人間だ」

「じゃあ。私の獲物だね」

「なら俺は貴様を刈り取ろう。生き残るためだ。悪くは思っな」

「????この状況で生き残れると思えるのか」

「思っかどうか？ 関係ないだろ？ 俺が生きるんだから。」

一息。

「ここでお前が俺を殺せるはずが無い」

「バカなのか？」

「生きたいと思っ人間をバカというならバカだろうな」

「そーなのか」

もう一度剣を持ち上げる。

まだ行ける。ここでは負けれない。

「……………俺は信じる。俺が信じた俺をな」

何かを感じる。

零崎の時とは違う。

熱い炎のような力を。

「俺の力は、未来を創るための力だ」

「………そーなのかー」

さつきよりも低い。

ぞくぞくする。

死ぬかもしれないという恐怖じゃなくて。

ただ強い相手と戦えるという、

闘争本能。

「行くぜ!!」

感覚が身体を超えて動きを与える。

剣を投げつける。

「それがどうしたの？」

少しずつ敵がイラついているのがわかる。

そのまま彼女は剣をはじく。

でも。

「この一撃はくらってもらうぞ」

槍を思いっきり突きさす。

「貫け!!」

貫通はした。

血液が顔に思いっきりかかり、当たったことを知らせる。

鉄の匂い。

人と変わらぬ血の匂い。

「・・・・・・・・痛いな」

まだ・・・かよ。

やばい。

剣はあつちの近くだし。

・・・・・・・・

「諦めるなよ。燕」

この声・・・・・・・・親父？

「諦めたらそこまでだって言っただろ？ 昔」

「なんで？」

「自分のガキ助けるのにや理由はいらねえ！！ 螺旋の魂背中に背負う。穴掘りシモンが相手になってやるよ。怪物野郎が！」

「ルーミアは女なのだー」

「・・・・・・・・それより。お前は腹がっ減ってるから人を襲うのか？」

「そうなのだー」

「なら俺の所へ来い！ 飯くらい食わせてやるよ」

「ほんとーかー！！！！」

目がきらきらしてやがる。

「おうよ！ うち材料にはこまんねえ。なんせ、とりたてだから」

もうわけがわからない。

とりあえず、ルーミアは俺の家に住むらしいな……………。
複雑だ。

怠惰な少年と闇宵の怪（後書き）

・・・

という事で東方もクロス。

此処からどうなるでしょうか？

では次回へ続きます。

怠惰な少年と螺旋の力（前書き）

そろそろ主人公を少しずつ覚醒させていきます。
では、どうぞ。

怠惰な少年と螺旋の力

「・・・・・・・・・・はぁ」

あの時の高揚感があの日から全く出ない。
もう5カ月も経って夏になりそうだ。

・・・・・・・・・・あの燃え上がるような・・・・・・・・・・焼けつくような。

「わっかんねえ」

少なくとも、アドレナリンでの高揚感出ないのは分かる。
それなら、遠い昔の人類最強との闘いで達している。
でもあの時とは違う。

集中力での力じゃなかった。

・・・・・・・・・・

「どうした？燕」

「・・・・・・・・・・親父はさ、こう・・・・・・・・・・身体ん中で燃え上がる
ような力感じた事無いか？」

「・・・・・・・・・・そうか・・・・・・・・・・。まあおかしくないな」

「あるのか!!」

こつも早く答えがわかるとは・・・・・・・・・・

「螺旋の力だ」

螺旋の力？

．．．．．螺旋。

生命力の象徴であり無限の象徴。

無限の力？

「螺旋力は．．．．．進化する力。人間として進化する力」

「？ 分んねえよ」

「ようするに気合いだ。．．．．．ちよつと来い」

気合い？．．．．．まあいいや。

「これ、やるよ」

渡されたのはゴーグル。

見たことが無いタイプだ。

．．．．．布にくつついてるみたいだな。

それとドリルか？

「それは、俺が旅に出た時からずっと持ってるもんだ。それをやる。
だからもう負けんじゃねえぞ」

それは漢の魂だからな。と親父はいつていたが

訳がわからん。

．．．．．

取り敢えず身につけておくか。

．．．．．寝よ。

「．．．村に悪名轟く．．．団．．．の魂背中に背負い．．．．．
．．．リーダー．．．．．が相手になってやっからそう思え!!」

「．．．お前を信じ．．．．．」

「あばよ…ダチ公」

少しずつはつきり聞こえてくる。
何て夢だ。

「俺は俺だ!! 穴掘り．．．だ!!」

「俺を誰だと思ってやがる!!」

．．．．．なんだよ、この夢は

「怒涛合体! アーク．．．．．!! 俺を誰だと思っていやがる
!!」

「．．．。お前の遺志は受け取った!!」

「人間の力見せてやるよ!!」

名前の部分が聞こえない。

「・・・ン。自分の選んだ一つの事がお前の宇宙の真実だ」

「行くぜダチ公」

何なんだよ

「「俺たちを誰だと思っていやがる!!」」「」

「一緒に行くぞロージェノム!!」

「シモン!! いっけーーーー!!」

「俺は信じる・・・俺が信じる俺たちを人間を未来を!!」

なんなんだよ!! 親父!

「ハア・・・ハア」

夢?

それとも・・・記憶・・・。

「バカらしい。顔洗おう」

・・・

「・・・・・・・・何なんだよこの目」

俺の右目は螺旋の渦巻く奇妙な目になっていた。

怠惰な少年と螺旋の力（後書き）

・・・戦闘書けなかった。
・・・

あ、次から黒曜編となります。
では、次回をお楽しみに。

怠惰な少年と九月九日

九月九日。

最近了平先輩が襲われたと聞いたが……..
まあ撃退したらしい。

このあたりの人ならまずしない事だな。

この周辺で先輩二人に喧嘩売るのが自殺志願者だけらしいから。

まあ女だったらしいので

すぐに帰したらしい。

というか送ってっらしい。

奇妙な髪の奴にお礼をいわれたそうだ。

「ん〜。おーす。雀につな」

「あ、おにいちゃん」

「……………朝から嫌なやつが」

「ほら、雀コレやんよ」

「なんだよ」

「誕生日今日だろ？去年渡せなかったからな。知ってる奴には渡す
つての」

「あ！そういえばラルさんは？」

「あいつは清掃委員」

しばらく顔見てねえ。

つても俺が道場で寝てるし。

あの家に何人もいるわけにもいかねえし。

現在7人家族だぜ？

信じられるか？

俺息子なのに一人だけ外だぜ？

親父は布団お袋も布団、

ラルも布団、ハルとルーミアがベッド。

んでおれが寝袋。

……冬は死ねた……。

「………ありがとう」

「んゝ何か言ったか？」

「なんでもねえよ¥¥¥」

さいですか。

まあいいけど。

「にしても最近多いよね。並中生が襲われるのって」

「そうですね、十代目。なんででしょう」

「さあ、まあどんな奴が来ても守ってやっから安心しろ」

・・・・・・

「それより右目大丈夫なの見えなくなっただけ」

「大丈夫だ。ショック性のものだから」

右目は包帯で隠しておいた。

流石に目立っしな。

「・・・・・・その君たち」

・・・・・・

「何だ？喧嘩なら買っぞ？」

「君は並中喧嘩ランキング第2位 山本 燕」

もしかして・・・・・・フウ太つかまっちゃったか？

門外顧問としては見逃せないが。

オレガノとターメリック何してんだ？

「ちなみに一位は？」

「笹川了平」

やっぱりか。

あの人と差がそんなないとは思っているんだが。

「まあいいや。二人とも。学校は危険と考えていい。家に行ってくれ」

・・・

「いいの？」

「ん？ガキに惨殺死体は拙いだろ？」

さて

「殺して解して揃えて並べて晒してやるよ」

鞆から剣を取り出す。

どうやって入れたとかは聞くな？

「どうやって」

「アウト！」

顔を殴り飛ばす。

アウト宣言はした。

いったあいつが悪い。

「・・・ヘッジホッグ」

・・・針か！！

この距離だと食らうか？

・・・毒物かな？やっぱり

「ならこれで！！」

爆音・・・

「回避成功・・・。。痛いけどな！！」

「っ!!」

近距離でお互いグレネードを喰らった。
来ると思ってるのと来ないと思ってるのでずいぶん違うしな。
それに。

「足元がお留守だ」

「!!」

閃光弾。

そして視界を奪った後に。

「みんな大好き。グレネード投下の時間だ」

いや人気あるかは知らないぞ？

俺が爆発物の中では一番好きなんだだけだ。

「・・・まだ・・・」

「そこまでにしなさい。千種」

「骸様!!」

「??あんたが大将かい？」

「うちの子が迷惑かけました!!!!」

「は？」

・・・

「つてことはその奴の暴走行為だったってことかい？」

「ええ。後できつく叱っておきますので」

「・・・・・・・・フウ太は？」

「あの子ですか？彼は千種が拾ってきたんですけど？
そうですね千種？」

「・・・・・・・・」

「千種なんで目を反らすんですか？」

「すみません骸様」

「目をそらさないでください！！！」

「あんたも苦労してんだな」

「いえいえ。出来の悪い子を面倒見ているだけですから・・・・。
あ、申し遅れました。最近とある刑務所から出所した六道骸といいます。

まあ弱小マフィアのボスです」

「俺は、山本燕。ボンゴレファミリー、門外顧問所属だ」

「そうですね。まあ今度ゆっくりお茶でもしましょう」

「ああ。出来ればこれ以上暴れないで欲しい」

「では失礼いたします」

「おう。じゃあな」

「
学
校
行
く
か
」
.

怠惰な少年と九月九日（後書き）

えゝ骸と千種が登場です。
ランチアではありません。
骸です。

あ、黒曜編終わりませんかからね？
大丈夫ですよ？
では次回をお楽しみに。

怠惰な少年と黒曜センター

・・・

(何回やつても何回やつても)

「あ、先輩からメール」

『恭弥が黒曜センターという所に一人で行ったから行ってくれないか？』

俺も後で合流する』

・・・

先輩何してるんだ？

「うう」

「千種！！やめなさい」

「骸様・・・こいつは殺さないと！！」

「どう考えても原因はあなたでしょう！！」

「・・・わるいけど・・・これ以上やるつもりなら・・・」

「加減出来ないよ」

「取り敢えず行かないとな」

にしても黒曜か。

骸もそのあたりに住んでいるって聞いたな。

「……っとうか」

装備は
・
・
・
・
・
・

RPG7もあるし大丈夫だよな。

[illegible]

「とりあえず………まだみんな来てないみたいだが………」

「ウォオオオオオオオオオオオオオンン！……！！！！！」

「！！」

咆哮。

鼓膜を思いつきり揺さぶりやがる。

「ガァッ
い！！」

意識が飛びそうになるのを舌の先端を思いつきり噛むことで戻す。

「グルルルウ」

「また女かよ」

最近戦う相手の割合女が多いんだけど。

「ガアアツアツア！！！」

「言語障害か？」

「うううううううう！」

「仕方ねえ。一気に決める」

相手の懐に潜り込んで回し蹴りする。

それを相手が受け止め投げられ……………

「なんつー、馬鹿力」

空中でつぶやく。

ここまで強引に投げられたのターメリック以来だな。

「……………ちよつと本気で行く」

手抜きしたら、
少しめんどい。

「零崎をはじめよう」

そう言おうとした、
でも出てきたのは。

「俺を誰だと思っていやがる！！」

なんだ。

この感じ。

あの時と同じ。

「一度はじめた事ならば逃げない、退かない、悔やまない。
前しか向かない、振り向かない！無いものだらけの漢道！」

零崎・・・・・・・・が相手になってやるからそう思え!!」

何なんだよ、俺。

・・・・・・・・まあいーや。

零崎の時よりも気持ちがいい。

テンションも上がって、頭がどうかなりそうになる。

でもな・・・・・・・・この状態なら、倦怠感よりも感じるのは。

「楽しませてくれよ!!」
快樂だ。

「グウ!!」

「あたんねえよ!!」

拳に対してナイフで対抗する。

剣だとこの場合でかすぎて小回りが利かない。
だからナイフを・・・・・・・・

「っらっああ!!」

なんで・・・・・・・・剣翳してんだ俺。

「ガグウ・・・・・・・・」

・・・・・・・・

何処からか笑い声をする。

「・・・・・・・・ああ俺か・・・・・・・・」

いつの間にカイク殺害者になってんだ俺
まあいいか。

ぼろ屑になった、獣女を放置して道を進む。

「ハハハ．．．．．」

感じるのは虚しさ。

まだ血が欲しい．．．．．。

本当に快樂殺人者になりそうだな．．．．．。

「ここから先は立ち入り禁止よ」

「そうか．．．．．。ツギハオマエガアイテカ」

口元に笑みが浮かぶのがわかる。

「取り敢えず、その身体。バラシテ、コワシテ、クダイテ、ステテ、サラシテヤルヨ」

「ひい！！」

一回でやってはつまらないので槍の腹で殴る。

「かふう」

．．．．．つまんねえ。

もっとタノシイノいないかな．．．．．。

．．．．．

「ねえ、ここなんかへんじゃない？」

「血の匂いだ。それとても強烈な」

（やべえな。燕の奴か雲雀だが・・・・・・・・燕か？）

「とにかく先に行きましょう。十代目」

「うんそうだね」

怠惰な少年と黒曜センター（後書き）

主人公が少しずつ悪い方に覚醒しつつありますが、
もう少しで治りますのでご安心を。
ではまたのご来場をお待ちしております

「死んでるぜ？　終わりまで知ってるんだからな」

「でも生きてるだろう？」

「終識は死んでるぜ？」

「終識も俺だろう？」

「でもおまえは零崎を名乗らなかったろうが」

「当然だ。俺は俺だ」

「やっぱり俺じゃないじゃないか」

「俺は俺だ。お前も俺だ。それに俺もお前だ」

「……いや。お前は俺じゃないだろう」

「俺だよ。間違いなくな」

「まあでも」

「それはそれで」

「「戯言だよなあ」」

「あの人か？」

「そうだな。戯言と言えば。まあ終識」

「なんだよ」

「外やばいぜ？」

「……お前が行けよ燕だろう？」

「みんなが求めてんのは俺じゃないだろうさ。快樂殺人者の俺よりも」

殺人者の俺が行って来い。

お前って実は人間失格か？

いいや？ただの快樂殺人者だ。

まあいやってくるぜ

「つ！！千蛇烈……」

いい加減に止まりやがれええええ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

!!

「だあああああああ！！！！！！」

[illegible]

「疲れた……」

ぼろぼろだ。

「久しぶりだな」

「なんていうか……互いに死にかけてですね」

「おかげでな……」

「てか俺記憶にないんですが。戦闘した」

「明らかに人の状態ではなか……」

「????ランチアさん」

「……ドサリという鈍い音がする。
ナイフをとっさに投げる。」

逃げられたか……。

「……燕か」

「おにいちゃん大丈夫!!」

「いや……。出血多量だ。まあ軽く止血すりゃ何とかなる」

「無理をするな。肉が削れて骨が少し見えてるぞ」

「これぐらいじゃ。倒れない……。まだ腕もあるか」

「……無理はするなよ」

「分っているつもりです」

昔の知り合いの敵位討てるだろう。

「さあ零崎をはじめよう」

「・・・・・・・・」

「良かったのか？」

「まあ。今更あそこに行っても俺役に立ちませんし」

「・・・・・・・・辛いだろう」

「当たり前でしょう。カミナさん」

「まあ仲間入り歓迎するぜ？山本 燕」

「いいえ。俺は終識です。あいつが今の燕ですから」

「そうか」

「・・・・・・・・」

螺旋の自分と過去の自分（後書き）

という事で。

暴走終了です。

．．．．．分りにくいですがとりあえず説明を入れると。

燕 転生後の意識になるはずだったもの。

しかし終識のせいで混ざる事が出来ずそのまま残っていた意識。
この話の最後にコアドリルに混ざります。

終識 転生前からの意識。

自我がほかの人間よりも大きく

通常転生者なら引つ張られるがそれが無かったのは
魂がうまく混ざらなかったからである。

現在の燕の体の使用者。

という感じです。

では次回をお楽しみに

怠情な螺旋と六道

さて残ってる武器を確認。

あいにく登校中だったため無限バンダナは持ってきてない。
よって。

こわれたRPG7と閃光手榴弾が10。

手榴弾が5つに雀から貰っておいたダイナマイトが7つ。

アーミーナイフが四肢全てについていてうち一本が損傷使用はぎり可能。

投げナイフが20にワイヤが28メートル。

碎け掛けの大剣一本に壊れかけの槍が一本。

「ぎりぎりだな」

「ダイナマイトまだいるか？」

「それ以上はお前が戦えなくなる。それにダイナマイトはトラップ程度にしかならん」

「……おにいちちゃん。むりしな……」
「安心しろ。俺を誰だと思ってる」

あゝあいつのが……。

まあいいか。あいつも俺だしな。

さて、人の家入るんだしちゃんと言わねえとなあ。

「おじやましまああああああああああす!!!!!!!!!!!!!!」

「!!!!!!!!!!!!!!」

間違いなく咆哮。

後ろの4人も耳ふさいでるし。

まあいいか。

気にせず駆け抜ける。

正面から突破する。

今日はあいつの趣向。

「君は」

「真正面から正々堂々。殴りに来たぜ。柿本!!」

「え?どういう事ですか千種!!」

「骸さ……」「齒あ喰いしばれえ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

拳を全力で振りぬく。

型も何もない。

ただの拳。

ただの一撃。

ただの喝入れ。

「………燕君。流石に僕も家族を殴られるのは許しませんよ
!!--」

「上等だ!!俺だって昔の知り合いが死にかけてんだ敵打ち。いや、
違うな」

「「お前・(君)を断罪する・(します)!!」」

刹那迫ってくる先端が銀の槍。
それをアーミーナイフの一本で逸らし右手のもう一本でたたき折ろうとする。
が。

「ツチ、misschoice!!」

折れかけだったアーミーナイフは逆に折れる。
仕方なくダイナマイトでお互いを吹き飛ばす。

「やりますね。ならこれでどうですか!」

周囲からいきなり火柱。それに地崩れ。

「問題ない。テメエに辿り着けばな!!!!」

槍を突き出し前へ突進。

火柱を突き破り骸の槍とぶつかり槍が砕け散る。

「まだまだあ!!!!!!」

大剣で薙ぎ払う。

「無駄です!」

今度も槍に砕かれる。

「退けねえんだよ。ランチアさんが死にかけてるしな!!」

砕けた槍をもう一度……!!!!

槍が戻つてる！

まあいいや。

取り敢えず。

「喰らいやがれえ！」

「ヘッジホッグ」

「！！！」

慌てながらも剣を壁にして……………？
剣も壊れてたはずなのに……………

つてか緑色の炎が！！

「まあ……………いいや！」

アーミーナイフを二本今度はしっかりとした奴。

「行くぞ……………」

振り回す。

振りかざさずに。

ワイヤは六番。

太く緊縛用に使ったための物。

それをナイフの持ち手についている穴に通して振り回す。
片方はしっかりと手に持ち。

接近。

「千種！！！」

「邪魔をするのはいかんぞ」

すごい鈍い音を立てて吹き飛ぶ骸。

「笹川了平。推参」

「同じく、沢田つな……………」

あれ？なんか雰囲気違う。

かつこいい……………。

いや女にカツコイイは失礼か？

「取り敢えず。まだやるか骸？俺はただ解毒剤が欲しい」

「……………そういえばランチアの事を言っていました……………」

「実はその眼鏡がランチアをさしてな」

「千種……………！！！！思いっきりあなたのせいじゃないですか……！」

「……………その事を言おうとしたらそいつが」

「言い訳無用です！！あつちで反省してもらいます！！」

「……………あ、ランチアの解毒でしたね。これ解毒剤です。ではお説教があるのでこれで」

……………

「なんというか」

「嵐のようだったな……………」

「そついえば雀ちゃんは!!」

「もうしばらくしたらくるだろ」

怠惰な螺旋と六道（後書き）

若干わかるかもしれませんが。
一応超つなめました。

雰囲気違ったのはそのせいですね。
ちなみに影では死ぬ気弾が使われていました。

ランチアの解毒は間にあつたので。
では次回をお楽しみに！

短編：螺旋の少年と潜入任務（前書き）

短編です。

暫くは短いので行きます。

では本編どうぞ

短編：螺旋の少年と潜入任務

9月。

その半ば。

「あゝこちらスパイス。ターメリック。応答しろ」

「こちらターメリック。現在西から基地に潜入準備完了した」

「モレッティ、東側の潜入準備完了」

そして……………

「こちらハル！準備完了です」

まあこいつも連れてきてしまったわけで。

というか戦力的にこいつくらいしか連れてこれなかった。

潜入に向いてる奴は少ない。

了平先輩はスネークさんと一緒に別のミッションだ。
ラル？

……………デート中で連絡が間に合わなかった。

そして。

「私も大丈夫です」

オレガノは俺と……………。

オレガノは基本的にこういう場に出ないんだけど……………。

「行くぜ……………^{ミッションスタート}任務開始！」

.....

と行っても今回の任務は身内じゃないから皆殺しにしてもかまわないんだが.....

まあ後味は悪いからな。

なるべく殺さないようにきめる。

もつとも.....

「殺したりする方がまだよくありませんかこれだと」

オレガノが指差している人間は、右腕がもがれて

左の手の甲にナイフが刺さり、

両足の腱が切られて、口に落ちたら爆発するような手榴弾。

「生きてるだけ、マシだろう？」

と少しずつ先に進む。

ナイフが後少ししかないからもうやめて欲しいぜ。
後十本。

「次からは銃にしておこうか」

と思いつつ次の奴の身体を先程のようにしておく。

そして装備を奪い取っておく。

やっぱナイフは無いか。

手榴弾だけでも.....。

「にしても手慣れてますね」

「スネークさんの時にこついつの何回もやりましたから」

本当は零崎の時にもやっていたが……。

まああんときは金目当てだったしなあ。

「今度からナイフは大量に……。」

つとそろそろ目的の部屋つと。

「任せて……完了よ」

ピッキングしようとしたのに。
ナイフで。

まあいいか。

「にしても。スパイスはこういうの慣れてるわね」

「……本当の事を言うとき昔にやった事があるからですよ。
生死の境目でしたから。やらなけりゃ」

「……分かりました。明日特急で帰りましょう」

「は？」

「シモンさんが貴方にどういう教育をしてるか見せてもらいます」

「……明日から野宿決定か。」

短編：螺旋の少年と潜入任務（後書き）

では、またのご覧になる時をお待ちしております

短編：螺旋の少年と鮫と蛇（前書き）

今回は飲酒ありとなっておりませんが。
主人公未成年です。ただし未来です。三年後です。
ではstart。

短編：螺旋の少年と鮫と蛇

「どうだ、一杯呑んで行かないか」

門外顧問の会合も終わり

スネークさんと本部まで歩いていると彼はそう言った。

「まあいいですけど」

煙草を一本用意して加える。

吸ってないからな。

身体に悪いしいい事なんてほとんどない。

俺は葉巻もが好きだ。

高いけど。

「・・・・・・・・どうしたんだスク？」

スクアーロが酔いつぶれてた。

「ううゝ。つばめえゝ」

「ほんとにどうした！！キャラ壊れてるぞ！！」

確かにスクアーロは酒に弱くアルコールが低くても酔うには酔うが
そこまで耐性が無いわけではない。

日本人からすればある程度の高さを誇っている。

が・・・・・・・・。

完全につぶれている。

「であいがないゝ」

は？

「スクってモテるだろう」

こいつヴァリアー………というかボンゴレでも同盟ファミリーでも人気たけえし。

出会いが無いとかないだろう。パーティにも出席するし。

「任務中で会えない日も多いし、いろいろあるのよ!!」

「だったらそういうのが似通った人付き合えば」

「私は百合じゃない!! レズビアンじゃない!!」

………。

そっぴやあヴァリアー部隊はほぼアマゾネス部隊だったな……。

俺いるから完璧ではないが。

あれもしかして

「それだったらお前が付き合え!!」

流石に無理だ。

ただでさえ昔立てまくったフラグのせいで女性守護者人から狙われているのに。

これ以上増えたら夜道で後ろから刺される。

「遠慮し」

「いいじゃないか。こんな美人に付き合ってくれと言われているん

だぞ？

付き合ってやったり慰めてやるのが男の義務だろう」

いや、流石に手までだせん。

というかいろいろ拙い会話になってる気がする。

「任務だって最近色の任務ばかりで暴れたりねえし」

「俺も最近潜入ばかりでな。そろそろ暴れたいと思っていたんだ」

もしかしてこれは。

「燕。任務だ」

「……何の？」

「ロシアの軍事施設を壊滅させるぞ」

！！

「明日だから忘れずに」

「武器は現地調達を基本とするがナイフくらいは持って行っていいぞ」

おいおいこれって。

「HALO降下だ！」

「ちょっと待て俺はパラシュート訓練は受けてない！」

しかも付き合っとか関係ないだろう！

「明日ホテルまで迎えに行くから安心しろ!!」

クソ完全に出来上がってやがる!!

後曰。

新聞の一面に三人のスパイにより

ロシアの軍事施設が壊滅したのは言うまでもない。

短編：螺旋の少年と鮫と蛇（後書き）

三人とも酒が入っています。

作者には入っておりません。

主人公が葉巻が好きなのはスネークが教えたということもあります。

．．．．．このスネークはネイキッドに近いです。

．．．．．では次回をお楽しみに

短編：螺旋の少年と闇宵と氷の妖精

「燕〴〵散歩行こ」

のんびりと浮遊しているルーミア。

「・・・・・・・・歩けよ。散歩だからな？歩けよ」

「そーなのか」

取り敢えず。まあ行く事は確定した。

別に散歩くらい大丈夫だしな。

さてと。

・・・・・・・・前みたいにならないよう無限バンダナ巻いて行くか。

迷った？

あり得ない。

ここは俺の領域。デトリリー

自分の家の構造を理解できないはずが無い。

幻術？

身体をさす痛み。

？おかしい。怪我はしていない。

つまり・・・・・・・・冷気

「ルーミア！ 飛んで周囲を探索してくれ！」

今回の相手は間違いなく人間の俺には厄介な相手。

打撃が得意とかならまだ勝てる可能性があるが

自然を操る相手に人間である俺がかなうはずが無い。

•

ピンを抜き閃光弾を十個適当に投げる。
相手が居ないならこれで十分。

[illegible]

声になっていない叫び。

大方もろに視界がつぶれたか。

やっぱり妖怪か？

もしくはただの子供か。

どちらにせよ普通あんなのがきたら直ぐ逃げる。
だから取り敢えず大人ではない。

声の位置から察した場所に居たのは。

氷を背中に付けた少女。

ルーミアと大差ない。

「やっぱりチルノかー」

「何だ？妖怪友達か？」

「ううん。チルノは妖精」

妖精か。

妖怪との違いってないんじゃないか？

「ううん。基本的に妖精は妖怪より弱いよ」

「???だがこの子から感じた力。若干お前より強かったがまさかお前妖怪最弱とかじゃないだろうな?」

「うっん。チルノは最強の妖精なんだ」

「最強ね」

「そーよ」

！！

「あんたは？」

「燕。人間だ」

「ふーん。そうなんだ。あたいはチルノ」

「元気にしてたのかー」

「あ、ルーミア何処行つてたのよ！」

「燕の家に住んでるのだー」

やばいな。

これでもし来られたら。

本当に野宿になる。

もうすでに外で寝袋なのに。

「あたい今家無しなんだー」

やばい。

ヤバイヤバイヤバイバ………

「ルーミアが住んでるからあたいまー」

良かった。

戦闘は無かった。

もついい。あきらめる。

さらば寝袋。

しかしまあ。

止まっても何とか寝袋は無くななかった。

チルノは小柄なためオレガノとかと寝る事に。
でも外は変わらん。

所で。なんでたまにチルノが俺の寝袋に居るんだ？

短編：螺旋の少年と闇宵と氷の妖精（後書き）

そろそろヴァリアー編に入ります。

短編は終了。

次回からヴァリアー編。

ではまたの御覧をお待ちしております・。

鯨、忍、デパートにて、螺旋の少年と（前書き）

お久しぶりです。

宣言通りヴァリアー編突入です。

どう入れましょうか悩めますが。

特攻させてもらいます。

鮫、忍、デパートにて、螺旋の少年と

「何ですか！！なんであなたが！」

「五月蠅い・・・・・・・・わたしは、彼女を守るために動くだけだ」

「おにいちゃん起きてー!!」

「なんできてんだよ。ここは公園だ。大声を出したら人様に迷惑をかけるだろ？」

「此処に住んでるおにいちゃんは人の事言えないでしょう？」

「・・・・・・・・最近言うようになったな・・・・・・・・っと、デパートだっけか？」

「うん！」

そう言うつつなの笑顔を見ると少し和んだ。
最近修行ばっかでかまってやれなかったしなー。

「そういえば他に誰か来るのか？」

「うん。雀ちゃんと京子ちゃん」

・・・・・・・・

「終わり？」

「だってボク友達少ないし……………」

まあいいか。

別に多くて何かなるってことも無いし。

俺と雀だけで十分守りきれし。

……………あゝそういやあ先月はヴァリアー会議無かったな。
いつもXANXUSがチケット贈って呼び出すのに。
何かあったのか？

まあ大丈夫だろう……………
もしかしてフラグだったか？

……………まあ……………なんとかするか……………。

「それでもならないのがこつ这个世界ってことだろうな！！！！」

なんでいんだよスクアーロとバジル。
仲良かったのにあいつら。

「雀！二人任せたあ！」

とにかく剣を召喚……………？

俺今どこから出した？

まあ……………どうでもいいや

少し路上に出て三人との距離を取る。

「スクア―ロ!!!!!!!!!!!!!!
バジル!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
んなとこでなにしてやがる!?!」

「燕!? しまった…………こんな所まで来てしまったのか…………」

「燕さん! 逃げて!」

「……………どうやら今回はスクが悪いみてえだな……………」

「闘うしかない……………か」

「鮫衝撃!?!」

いきなり!?!

にわか仕込みだけど。

直で食らうよかましか…………

「螺旋フィールド!?!」

緑色の炎が目の前で渦巻き刀をはじき返す。

「スカルブレイク!?!」

はじいた身体を追い、頭部を鷲掴みにする。
そして剣を付けている手を左手で拘束。
そのままアスファルトへ叩きつける。

「それが当たると……………思った?」

爆音。

たたきつけようと思っていた俺が地面へ叩きつけられた。

何があった？

何が………。

「チェックだ。油断したな。燕」

「やばいな」

そうして、スクアーロは俺の耳元に顔を寄せ。

『

』

そのままとどめをささずに行った。

「………。誰にも言えない………。口封じか？」

いや。

でも、もし本当なら拙い事になってるな。
ヴァリアーでまともに意識があるのって。

「俺とスクアーロだけってことか」

しかもこのままいくと間違いなく。

「死んじまうんだろうな。スクアーロも俺も」

………

鯨、忍、デパートにて、螺旋の少年と（後書き）

って事でヴァリアー編が開始します。

・・・・・・更新速度は落ちます。
すみません。休みが終わりますので。

原作沿いはここで終わり少しオリジナルの戦いとなります。

では次回をお楽しみに

晴れ、リング、拳圧で（前書き）

えゝ長らくお待たせしました。

今回はサイドが了平となっております。
いつも通りのキャラ崩壊のキャラ達で

戦闘開始

晴れ、リング、拳圧で

「……………今日は。お前の日だ」

「分っている。BOSS」

「お前なら。俺たちから受け継いだ技を使いこなせると信じてるぜ。
コラ！」

「その期待に添えるようにやるようやってやる。極限に」

リングを渡されて一週間。

昨日、獄寺とハルが襲われていた。

そこを、あの後輩が突撃し、俺と恭弥も参戦し

リングを渡しに来た青髪の男が止めてくれたのが一週間前、
そして、その時に公表された。

闘い（殺し合い）の順番。

俺が最初。

次は雷。

獄寺が嵐。

燕の雨。

霧の六道に。

雲の恭弥。

そして大空の沢田。

「あ、了平さん」

「了、大丈夫なの？」

二人だけ。

一方あつちは

「全員か……」

いや良く見ると一人。あの銀髪の女が居ないが……

もしルールを破られる……という事になれば、

こちらの不利は否めない。

まあ、よく見ると空中に七天の機動戦艦hunter pigeon
があるから、

よほどの事が無い限り……いやよほどの事があっても
違反はしない。

「そつちは誰なんだ？ 誰であろうと」

倒すただだが

「アタシだ！！」

「そうか。俺は……ボンゴレ晴の守護者、七天、黄色の空
BIGBOSの弟子にして青のアルコバレーノコロネロの弟子！
！笹川了平だ！！」

叫ぶ。

これくらい威嚇の意も無さないが、心を震わせるにはちょうどいい。

「笹川了平か！そんな肩書何ぞ関係ないだろう？互いにぶつけ合うだけだ。力と力を！！」

「そうだなあ！！」

「まあ！一応名乗るよ！アタシはルッスーリア。ヴァリアー晴の守護者だよ！」

「そうか。行くぞ！！」

第一の構え。

拳闘。

「へえ！！ボクシングかい！いいじゃないか！！でも、立ち技最強はムエタイだよ！！」

リングが急に光に照らされる。

スポットライト・・・・・・・・のレベルじゃないな。

「先輩！！雲雀さん。先輩大丈夫なんですか？！」

「心配ないよ。だって、了だもん」

「いきなりあんたが不利だね！！」

「ボンゴレの晴れの守護者は逆境を打ち破るもの。これくらいの逆境を打ち破れないものになる資格はないだろう？」

「はは！！確かにそうだなあ！！あんた気に入ったよ！！生き残ったら付き合わないかい」

「それは面白そうだな！！」

拳をその声を頼りに奮う

「！！ホントに堅気の人間かい！？」

「さあな。軍事訓練くらいならこなしたが！！」

しかし。

かすっている。

バンテージにはルッスーリアの血が少量付いている。

これで。

声を聞く必要はないな。

「いってー！！でももう喋らなきゃわかんねえだろ！！」

「・・・・・・行くぞ」

拳を奮う。

今度は全力。

「嘘！！なんで当たる！！」

匂いだ。

血の香りで場所がわかる

「もつとたたかおう。どちらかがつぶれるまでな!!」

晴れ、リング、拳圧で（後書き）

ということでした平さん。

原作よりもかなり強化されております。

原作では了平がボロボロですが。

こちらではどうなるでしょうか。

ではじかいにつづきます。

次のごアクセスをお待ちしております

晴れの覇者（前書き）

引き続き了平視点

晴れの覇者

「……降参してくれ。俺は、闘う事が好きなだけであいつみたいに殺しが好きなわけではないのだ」

最もあいつは嫌いとか言っていたが、

あいつの匂いは人間の匂いよりも獣の匂いだった。しかし、あいつは。

人間だ。

「わりいけど。そりゃ出来ねえ!!」

アタシはルツスーリア!!

悪魔の蠍!

ボスに!!!頼まれてんだ。譲れねえっての!!!」

「……そうか。最初に言っておこう。お前は下手をしたら二度と闘えぬ。もしかしたら死ぬかもしれない」

右のバンテージを解く。

「上等だ!!!」

「そうか……。最後に一言だ。すまない」

ガガガ。という音とともに上のライトが砕け散る。

「まさか!拳圧で!!!」

「行くぞ………霸王の鉄拳 オーガ・ジャツジメント！！！」

右拳の一撃。

「潰れる」

「ししし。リングぶっ壊れてるし」

「ルッスー！！！」

正確には当ててはいない。

この技の正体はただの拳圧だ。
ただし。

体中の筋肉の細胞を異常なまでに活性させて放つ技。
いや、技ではない。

喧嘩のような殴りだ。

………しかし。

「………右腕がつぶれたか」

一週間は治らんなこれは。

右腕が一撃でボロボロになり、動かない。

このままでは休息を取らない限り右の一撃がすべてこれになってしまいうだ。

流石にまずいな。

………。

「………ま………だ………だ」

「やめる。お前は・・・・・・・・」

ドスン、そんな音がした。
崩れ落ちるルッスーリア。

「雲雀！！」

「分ってるよ！！」

「そこまです」

女に止められた。

「邪魔だ！！」

「・・・・・・・・本日の勝負は。笹川了平の勝利とします。リングを・
・・・・・・・・」

明日は雷となりますのでお忘れなく」

「！！」

此処までするのか？

ボンゴレは。

コロネ口師匠もBOSSも言っていた。

ボンゴレは、ファミリーを大切にし、礼節を重んじると。
それなのにだ、

[!]

[!]

すでに声にすらならなかった。

ただ、
吼えた。

ガラス片が身体に降り注ぐがそれすらも砕いて行く。

[illegible]

リングが光る。

•
•
•
•
•
•
•
○

傷が・・・癒えている？

しかし痛みはある。

でも。

傷は無い。

何だっ
たのだ
・
・
・
・
・
・
。

「先輩。ごめんなさい!!」

「……沢田。俺は気にしてない。」

お前がここに巻き込んでくれた事には、感謝しているくらいだ」

あの集団が悪なだけだ。

「……これからもよろし」

意識を手放す。

痛みは……引かなかったか。

現在

了平　　ルッスーリア
ハル　　レヴィアタン

???	???	???	???	???
???	???	???	???	???
???	???	???	???	???
???	???	???	???	???
???	???	???	???	???

晴れの覇者（後書き）

という事で。

一応晴戦は終了です。

兄さんが熱い回です。

多分もう彼があまり熱くなる事はありません。

では、

またのご来場をお待ちしております。

狂気、ハル、雷撃にて、電気鼠と

「燕。いいのに行かなくて？」

「・・・・・・・・俺は。顔合わせられないよ」

「・・・・・・・・七天の全員に連絡は回ってっから。何かあったら相談しとけよ？」

「・・・・・・・・悪い親父」

「気にすんなって。・・・・・・・・取り敢えず警告だ。お前は今完全に壊れている」

「あ？」

ふざけてるのか？この親父は。

「・・・・・・・・狂う。狂気の匂いだな」

狂う？

「取り敢えずの警告だ。精神病はきついからな」

「俺のどこが狂ってんだよ」

「・・・・・・・・目が虚ろだ。道場にこもる・・・・・・・・修行をするんじゃない壁に寄り掛かって生気までないんだ」

「大丈夫だつてんだろ!!」

スクは一人でやってんだ!!
俺が………たよってられ

「歯あ喰いしばれ!!」

右から拳がくる。

しかし。飯を食わずに力が出ない俺は力の方向にそのまま流されるように吹き飛ばされる。
だが、響かなかった

「……………ごめん親父。もうちょい時間くれ」

「……………それが答えならいくらでもやる」

……………スク

「ハルいいなー。夜なのに外でれてー」

「何処行くの!!」

「んーちよつと用があつてね」

バカのせいで下界に落ちてからというものこいつらの子守りばかりだった。

まあ最近は鍛えてもらってたんだけど。

にしても、私もだけどあれほんと人なのかしら？

「まあいいか。バカっぽく言うならこれもまた」

戯言なんだから。

雨で屋上か……

「ごめんなさい待たせた？」

「いいえ。私は、待つてなどはおりません。ウォーミングアップはしていましたが」

「そう。ならよかったわ」

パッパと終わらせて、あのバカ立ち直らせなきゃなんないからね。

「始めますよ？」

「了解しました」

「いつでもいいわよ」

さて、今は代理みたいなもんだからね。
このセリフで切り替えましょう。

「さあ、殺戮をはじめましょう!!」

「・・・・・・・・・・」

雨で校舎の屋上の床は滑る。
でも別にそこまで走れないわけじゃない。

「電気ショックー!!」

あの人は自分の事を電気鼠とか言ってた。
まあそれが単に身体から電撃をほとばしらセルだけって意味じゃないのは

私でも分かる。一度管理者から外れたからもう分かんないけど。

それでも、人じゃない人だってことがわかる。

でも、それは関係ない。

借りたというか。教えてもらった力。
使わせてもらっわ!!

「・・・・」

「え？」

電撃が動いて別の方向に・・・・・・・・

「ひらいし・・・・・・・・」

「一応忠告する。危ないわ」

言葉が届くが遅かった

「あああああああああああああああああああー!!」
私は電撃を食らった・

ここか

「入るぞ? 燕」

「・・・・・・・・・・先輩」

「・・・・・・・・・・大丈夫? 燕?」

「ええ、すみません。先輩行かなくて」

「・・・・・・・・・・いや、いい。取り敢えず勝ってきた。もつとも、
右腕が全治六日ほどだ」

「・・・・・・・・・・右腕えぐれてるじゃないですか」

「心配しなくても大丈夫だよ。了の再生力はだてじゃないからね」

「そっすか」

「・・・・・・・・・・まあ。沢田が心配していた。
俺たちも心配している。それだけ覚えといってくれないか?」

此処まで傷が深いとは思わなかった。
何があつたのだ。

「ハア・・・ハア・・・」

つく・・・そ。

「ゴムの靴でも履いてくるべきだ」

「そうね。今度からそうするわ」

でもこれで技が限られる。

はめているグローブから電撃を発生させる。

その中で必要なプロセスはあまりない。

元からあの人が修行用に使っていたものだからだ。
でもその分、すべて怠れない。

「諦める事を推奨する。私は非常ではない。リングを渡せば何も」

「・・・なめるな・・・。私だって。あんたに一発ぶちこむくらいできる」

まだやった事が無いしあの人も一回見せてくれたただけだ。

「これで決まりよ・・・」

私はポケットに入れておいた一枚のコインを取り出した。

狂気、ハル、雷撃にて、電気鼠と（後書き）

・・・・・・一か月ぶりとなります。

今回はいろいろと視点が変わっていますが。

一応燕　ハル　了平　ハル

と一人称が変更されていきます。

何故燕が精神が病んだかはしばらくしたら分ります。

それでは。

股のご来場をお待ちしております。

もう一つの電磁砲

「何をするつもりかは知らないけど。電撃は避雷針を伝って貴方に当たるわ」

「だまつとりんしゃい!!」

「・・・・・・レヴィ・ボルタ」

傘が開かれすべての中心に私がくる。

このままいたら当たるわね。

でも

此処で逃げても負けだしな！。

せめて。

一発喰らわせておくのが礼儀ってやつでしょ？

「行くわよ。充電完了!! MAX100%突破!!」

これが私の最強の技!! あんたが受け切れるかしら?」

「!?!?」

「いくわよ!! 超電磁砲!!」
レールガン

「……………あゝあ、やっちまったか」

「^{ライキ}雷輝お前。アレ教えたのかよ？」

「んにや？別に教えてなんかいないって。俺が教えたのは電気の操り方。」

「アレは一回見せてやっただけだ。」

「身体への反動とかそこらへん考えると人間じゃまず一発で気絶するししばらく動けないしな」

「まさか、トレースされるとはな。」

「それよりも、アーク。お前ん所の弟子大丈夫なのか？お前の幻影はリアルだし。」

「機械もだめなんだ。加減してねえと死んでるだろ？」

「彼もそんな甘い人間じゃないから問題ない」

「んゝ信頼してんだなゝ。」

「俺にやマネできねえや。」

「しかし七天じゃないお前は楽だな」

「そうでもないって。祐一も能力的都合上はあの子との相性悪いって早々に判断してカミナの援護だしさ」

「まあ。どうでもいいがぁりや。」

「負けたな」

「あ……あ……あ……ああ……あ」

自分の体が……いや臓器が焦げているのが感じられる。
口の端から煙が出ている。

あふれだした血液がのどを逆流してこれも口端から垂れ流る。

そして、なんとか相手を見る。

「……甘い。確かにその攻撃は優秀。実に命中力、スピード、威力バランスも取れ高い破壊力を誇る。だけど。一人でその技を使わない事を推奨する。その技は反動、攻撃までの隙、そして何よりも殺せる可能性は低い。どうせなら、中を爆発物にして加速させる事をお勧めする」

彼女は立ってた。

間違いなく当たってはいた。

ただし、膝を貫通しただけだったらしい。

「……」

最後の力でリングをチェーンから外し相手に投げる。

「……降参を認識した。……」

私は負けた。

「カイブツ」

最初に呼ばれたのは確かそんな感じだったはずだ。
なんですか？
そんな理由は忘れてしまった。

「ニセモノ」

これは、人を殺し始めたころに言われた。
たぶん物を壊すように殺し続けたから。

「アイボウ」

これを言ってくれたのは……誰だっけ？

……

「あゝ夢か……」

空が光っている。

雷か。

そういえば。

ハルの日か……。

勝ったかな？

「ツバメ……」

「……チルノ？どうした？」

「ハルが！！病院に！！」

は？・・・。。。

俺は理解するのに数秒使った。

もう一つの電磁砲（後書き）

ハル敗北です。

原作との相違点は……。

たぶんつながりなかったから、誰も助けなかったってことですかね？

そんな感じです、

それでは。

次のごアクセスをお待ちしております。

STAND UP

.....。

やめろ。

ヤメロ。

ヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロ

ヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロ

ヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロ

ヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロ

ヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロ

ロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロ

ヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロ

ヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロ

ヤメロ

ヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロ.....。

やめてくれ。

目から映像が流れ込む。

絶望の記憶。

死死死死死。

脳内にこびりつく。

明確な死。

ずっと右目から送られる死の映像。

螺旋の記憶。

本来あり得なくはなかった。

Ifの世界の映像。

未来の世界の映像。

もし俺が俺じゃなかったら。

俺の記憶を持たないオレだったら。

もしもしもし。

その連鎖。

螺旋・・・・・・・・回転・・・・・・・・。

ドリル・・・・・・・・？

左目に映像が浮かぶ。

それが脳にこびりつく。

そして。

すべてが繋がった。

「どうした？ガキ」

「カミナさん？」

なんでこの人が？

確か今イタリアで

「なんのことだ？ジーハ村に悪名轟くグレン団！！男の魂背中に背
負い不撓不屈の鬼リーダー・・・・・・・・いやもう俺はそうじゃねえか。
・・・・・・・・グレン団。カミナだ」

・・・・・・・・よく見ると。

今より若干背が低い。

ってことは過去の話なのか？

「螺旋の力に魅せられちまつたみてえだな。燕」

「何で俺の名前を？」

「シモンがずっとお前の事を言ってたからな。もう覚えたよ」

??? 親父が?この人と知り合い?

「まあいい。取り敢えず。歯あ喰いしばれえ！！！」

ただの喧嘩殴り。

狂気も殺意もない。

純粋な拳。

何故か俺はそれを受け入れた。

はじき飛ぶ身体。

身を起す。

手を握り思いつきり殴りに行く。

「才才才才才才才才才才才才才才才才才！
！！！！！！！！！！」

「そうだ！叫べ！！心から不安も！恐怖も！全部全部！！吐き出しちまえ！！」

俺の拳は交わされ再び顔面を床に強打する。

「嘗めんなあああああああああああああああああ！
」

気がつけば俺の手には槍。

「おもしれええ！！」

そいつの手には日本刀。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおお
！！！！！！！！」

「らあああああああああああああああああああ
あああ！！！！」

剣と槍が交錯する。

互いの体を傷つけあう。

昂ぶる。

零崎の時なんかよりもっと。

心臓が大きく脈を刻む。

「てめえ！俺を誰だと思っていやがる！！並盛の町に武勇の轟く浅
利組！！」

自分の思いをこの身に刻む！！不撓不屈の切り込み隊長！！
豪雨の燕が相手になっからそう思え！！！！」

「……………それでいいんだよ。前に進め。燕。てめえの命は何の

ためにある。

誰かを守るためとか死なせねえとかそんなのまどろっこしい事考えんな。

お前の命はお前が生きるためにあんだ。こんなところでウジウジ悩んでんじゃねえ。

一回決めたらそれを貫け。それがお前の魂たまだろうが」

・・・

分ったよ

「カミナ」

・・・

映像は消えた・

「stand up」

さて、前に進むか。

STAND UP（後書き）

という事で主人公

燕復活編。

鬱の原因はこんなのです。

・
・
・
・
・

ではまたのご来場をお待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6575m/>

とある怠惰な殺人者の転生記

2010年10月15日21時48分発行